

「老人と海」再考

佐藤英夫

1. はじめに

E. Hemingway (1899~1961) については、彼の実生活上のエピソードから見ても、又作品論から始めるにしても、結局は同じ終着点に到達するものである。勿論、作品も実生活も E. Hemingway の場合はじかにつながっていると信じこませるところに彼の文学の特質と魅力がひそんでいる。今回、数多い作品の中から特に Nobel prize for Literature の受賞対象作品になった “The Old Man and the Sea” を中心として E. Hemingway の力説する人間の悲劇的な運命についてどんな描写をしているのか、又どんな表現法を用いているのかについて述べて見たい。“The Old Man and the Sea” を述べる前に Lost Generation の代表的作家である E. Hemingway の作品や手法なるものについて簡単に触れておこう。

E. Hemingway の名声は古く 1926 年出版の “The Sun Also Rises” で Lost Generation の作家として一躍有名になり、以後その名声は動かずに天下に響き渡り、今回述べようとする “The Old Man and the Sea” に至るどの作品もベストセラーに数えられ、その中から映画化された作品も多くある。そして 1954 年には Nobel prize for Literature が与えられ W. Faulkner と並び 20 世紀アメリカ文学の最高峰に数えられるようになったのである。これまでの E. Hemingway 文学を図式に示して見ると、まず長篇小説として、“The Sun Also Rises 1926”、“A Farewell to Arms 1929”、“To Have and Have Not 1937”、“For Whom the Bell

Tolls 1940”, “Across the River and into the Trees 1950”, 等があげられ、中篇小説として、“The Torrents of Spring 1926”, “The Old Man and the Sea 1952”, がある。更に E. Hemingway の作品の中で一番数の多い短篇小説として、“In Our Time 1925”, “Men without Women 1927”, “Winner Take Nothing 1933”, “The Snows of Kilimanjaro 1934”, 他に短篇小説総数は49篇もあり、戯曲小説 “The Fifth Column 1933”, などもあり、エッセイ旅行記として “Death in the Afternoon 1932” と “Green Hills of Africa 1935”, の二篇が出版されている。又彼の死後刊行作品として、“The Dangerous Summer 1960”, “A Moreable Feast 1964”, “Islands in the Stream 1970”, 等がある。彼の主要作品は以上でほぼつきるのであるが、習作時代に書いた少数の詩、映画シナリオ、等もある。出版年代から見ても理解できるように、彼が最も多産であった時期は1925年頃から1930年代の終り頃に至る約15年間で、25才頃から40才頃までのいわば、人間としての一番働きざかりの期間に相当している。

E. Hemingway の文学的経歴は明らかに一次大戦直後の混乱や矛盾、変動の中から始まったものである。E. Hemingway は Hard-boiled Realism である。既に自己の同情や怒りというものを小説の中にもちこむことを極度に制御して、何げない素顔で行為をさしだして見せるのが特徴とされている。その特徴が一面で力強い即物性と簡潔な行動把握に満ちあふれた文体は新聞記者スタイルの文学的精練とも言えるものがあるのである。又、E. Hemingway の作品は登場人物の心理に立入ることをせず、登場人物のちょっとしたしぐさや一見何でもなさそうな短い会話を記すことによって、その心理の動きを暗示するに止めている。このような手法で描かれた小説は、当然のことながら、涙や怒りの少ない、むしろ乾いた世界に人物を外面から見た行為だけが存在するようになる。このような態度で小説が展開し、物語るのがいわゆる Hard-boiled Realism であって E. Hemingway はそ

の代表的作家である。

既に周知されているように、E. Hemingwayの文章は口語体で、一音節の語を多用し、大抵は20語以内の短い文章である。しかも単文で複文をさげ、[and] や [but] のような接続詞で文をつなぎ、修飾語を少なくして簡潔な文に作成しているのが根本になっている。E. Hemingwayは“The Sun Also Rises”で戦後世代の虚無と絶望と焦燥から出発して“A Farewell to Arms”ではその絶望の源をきわめ、人間の営みのむなしさを語り、30年代に入って、次第に社会的関心を示すようになり、“To Have and Have Not”に於いては持たざるものに味方し、“For Whom the Bell Tolls”の人生肯定にまで至りつき、fascismとの戦いの正しさを説いて、自己犠牲を讃美するに及んだと見られている。

“For Whom the Bell Tolls”以後E. Hemingwayの長い沈黙の期間には第二次大戦がはさまっていた。E. Hemingwayはその大戦に参加し活躍したことを考えれば、当然創作に熱中する暇がなかったことも長い沈黙の一因である。しかしE. Hemingwayの芸術（文学）を支えた否定的な態度が希薄になり、肯定的態度で書いた小説が非芸術であることを証明してしまった以上、小説そのものを書く必然性を喪失していたとも批判されるわけである。“The Old Man and the Sea”はいわば彼の第二の道によって書かれた作品であろうと考えられる。

何故ならば、この作品に設定された主人公——釣の名人という過去の名声をにない、現在は廃人と嘲けられている老人——は同じく過去の名声を背負った作者E. Hemingway自身をそのまま写しているように感受されるからである。過去の否定的な人生観の代りに、非常に困難な環境を設定して、否定も肯定も示さずに唯その困難な環境に逆わず、必死に苦闘する老人の姿が描き出されている。

2. 老人と海

E. Hemingwayは“Across the River and into the Trees”を書く前から長編ものに手を加えていたと言われているが、その一節とも見られる“*The Old Man and the Sea*”を1952年9月1日号の雑誌*Life*に全篇発表し、続いて1952年9月8日に単行本としてScribner's社から出版された。これは1951年4月末には既に完成していたと言われるがそれを更に1952年の初春書き改めたもので27,000語のいわば中篇小説である。

この“*The Old Man and the Sea*”はE. Hemingwayの生涯に於ける *salao* (……which is the worst form of unlucky……)^{p5} の状態にあった時の作品であることは言うまでもないが、かつて名声を欲しいままにしていたE. Hemingwayも“*For Whom the Bell Tolls*”以後10年間の沈黙と、その沈黙を破って初めて発表した作品、“*Across the River and into the Trees*”の不評によって酷評をこうむっていた。この物語自体はGeorge BakerによるとE. Hemingwayは1939年2月7日Scribner's社の編集者であったMaxwell Perkinsに彼がハバナ近くのカサブランカと言う漁師の集まる所に住みついている老漁夫の小説でも書こうと思っていると伝えられたと言うことである。一方Philip Youngによると1936年4月号の*Esquire*に“*On the blue water*”と言うエッセイがあってその中に次の様な“*The Old Man and the Sea*”の原型と思はれる一節が見られると説明している。それは「また、ある時ある老人が、テント小屋を出て、小舟に乗ってひとり釣りをしていて、大きなマカジキを引っかけた。それは重い手釣りの糸にかかって、小舟をはるか外洋へと引いていった。それから二日後、老人は東の方、60マイルの所で漁師にひろわれたが、マカジキの頭尾が、小舟のわきにくくりつけられていた。その魚の残された部分は半分足らずであったが、800ポンドの重さがあった。老人はその魚と二昼夜にわたってやり合い、その間、魚は深くもぐりながら、小舟を引っ張り続けた。マカ

ジキが浮いてくると、老人は小舟を寄せ、もりを打ち込む。なぐりつけ、突き刺し、かいで突き、そしてしまいにはへとへとになり、鮫は手あたり次第に肉を食ってしまう。漁師たちがひろい上げた時、老人は魚を失って半狂乱になり、泣いていた。しかも鮫はなお小舟のまわりを泳ぎまわっていた。¹

E. Hemingwayはこの話を“The Old Man and the Sea”の原型として、孤独な老人の忍耐と勇気とを象徴的な物語に仕上げたものである。“The Old Man and the Sea”の主人公である老漁夫は、海だけを生涯の相手として生き抜いて来た孤独な人で、一人の少年の他には今や誰も彼の相手をしてくれる人はいない。彼は短かい眠りの中で見る夢を楽しんで毎日漁に出かけるのである。しかし84日間も魚の取れない日が続くと、もう食べるものさえ乏しくなってくる。不漁が原因で自分の舟の帆までもメリケン袋のつぎはぎだらけになり、帆を巻くと完全な敗北を感じさせるものがあった。ある朝、彼は仲良しの少年に“I feel confident today.”^{p23}（今日は自信がある。）^{p28}と言って舟を沖へこぎ出す。希望をすてずに、彼にはいつもEvery day is a new day.^{p29}（とにかく、毎日が新しい日なんだ。）^{p36}なのである。

沖に出て糸をたらすとその一つに珍らしく魚が喰いついて来た。手応が感じられた。魚の弱るのを待って引寄せようとするが、魚はまだまだ強気で弱る気配が見られない。太陽が沈み、再び太陽が昇ってくる。結局彼は不眠不休で3日3晩の間、魚の動くままに沖の方へと流されて行った。彼はI wish I could show him what sort of man I am.^{p62}（おれがどういう人間だか、やつに思い知らせてやりたいものだ。）^{p81}とかBut I will show him what a man can do and what a man endures.^{p64}（しかしおれは、人間ってものがどんなことをやってのけられるかを、やつにわからせてやるんだ、人間が耐えていかねばならないものを教えてやるんだ。）^{p84}とと思っている。網を持つ方の手は血まみれになり、生命にかえても仕止めようとする

老人の執念が浮きぼりにされる。

ようやく魚が海面に姿を表わし、彼はこれまでに見たことがないほどの大きさに驚いた。網をたぐり上げ、「もり」で一突きして凱歌をあげるが、1500ポンドもあろうと思はれる魚を舟腹にくくりつけての帰途、舟腹の魚を狙って二度も鮫の大群に見舞れる。老人は“*But man is not made for defeat.*”……“*A man can be destroyed but not defeated.*”^{p103}（けれど、人間は負けるように造られていないんだ。……そりゃ人間は殺されるかもしれない、けれど負けはしないんだ。）^{p136}と一貫した考えで鮫の大群を「もり」で突きまくる。「もり」が使えなくなると、今度はオールの先にナイフを結んでこれを武器として使うのである。しかしそれも鮫の勢いに勝てず折れてしまう。数々の手段を講じて鮫と闘うにもかかわらず、手段の講じようがなく、喰はれるままにして、どうやら岸边にたどりつく時には、魚は骨だけが残され、見る影もなくなっていた。死んだように敗北を知った老人はテントに帰り、少年に見守られながら、広々とした野原で戯れるライオンの夢を見て、深い眠りに入っていく。

3. 老人と少年

“How old was I when you first took me in a boat?” “Five and you nearly were killed when I brought the fish in too green and he nearly tore the boat to pieces. Can you remember?” “I can remember…….” “Can you really remember that or did I just tell it to you?” “I remember everything from when we first went together.” The old man looked at him with his sun-burned, confident loving eyes.^{p8~9}（「いちばん最初に、ぼくを漁に連れてってくれたのはいくつのとき?」「5つのときだ。魚を釣りあげたとき、やつ、まだぴんぴんしててな、おまえはもう少しのところで殺されそうになったっけ。なにしろやつ、ボートをめっちゃく

ちゃにしていまいやがってな。覚えているかい？」「うん覚えている。……」「そりゃ、おまえ、本当に覚えているのかな。おれの話を知っているんじゃないかね？」「ぼくみんな覚えているよ、最初るときからずっと。」老人は日やけした、信頼ぶかけな、やさしい眼つきで少年を見つめた。)p7~8 テンポの早い自然な会話である。作者の心理分析と言ったものではなく、すべて行動と事物とをあるがままに外面からの描写である。この会話からも読み取れるがE. Hemingwayは老人と子供とのなごやかな雰囲気から物語の出発である。少年は5才の時に、老人の船具をもてるようになってから、ますます親近感を加え、好きな漁をすることによって楽しい毎日が送れる。老人が海に出ない時は、その少年を相手にして、魚釣りの他に、少年が思いもつかないアメリカ大リーグの野球についても、詳しく面白く語ってくれるのである。しかし上手な漁師として知られていた老人にも、何もかも若く、元気のある昔がいつまでも続くわけではない。海に出ても一匹の漁もない日が40日間も続くと、少年の両親は少年を老人の船から別の船に乗換えることを余儀なくしてしまうのである。“It was papa made me leave. I am a boy and I must obey him.”p6 (「お父さんなんだよ、いけないって言ったのは。ぼくは子供だ。言うことをきかなくちゃならないんだ。)」p5と少年は老人の孤独さを知ってのセリフを述べ、その中には老人に対して「父の言」とは言え子供なりの責任感を感じているのである。そこで老人は、The old man had taught the boy to fish and the boy loved him.p6……“If you were my boy I’d take you out and gamble,” he said. “But you are your father’s and your mother’s and you are in a lucky boat.”p9 (これまで老人は少年に魚をとるすべを教えてきた。そして少年は老人を慕っていた。p4……「もしおまえがおれの子だったら、もう一度つれてって、いちかばちか、やって見るんだが。」と老人は言った。「でもおまえは、おまえのおやじの子供だ、それからおふくろのな。それにおまえの乗ってる舟には運がついている。』p9

いくら弁解をしても、少年がいくら老人を慕っているとしても、又少年の乗換えた舟に運がついているとしても、少年自身に満足できることではないのである。反面老人に於いても、“Why not?” the old man said. “Between fishermen.”^{p7}（「よしきた、漁師仲間には遠慮はいらないものなあ。」と老人は答えた。）^{p6}とは言っても過去の輝やかしい名声が一転している現在と、世論からの批判とを考え合わせれば、同乗できないだけのことを悟っていたかも知れない。いづれにしても運命の皮肉（反語的）そのままに写している。更に野球（アメリカ大リーグ）で一番上手な選手や監督の話から転じて、老人と少年の会話が次のように続けられる。

“And the best fisherman is you.” “No. I know others better.” “Quéva,” the boy said. “There are many good fishermen and some great ones. But there is only you.” “Thank you. You make me happy.”^{p19~20}（それで、一番えらい漁師はお爺さんだね。」「ちがう。おれはもっとえらいやつを知っている。」「ケバ、〈スペイン語＝とんでもない〉」と少年は言った。「うまい漁師は多くさんいるよ、えらい漁師だっていくらでもいるよ、でもお爺さんは世界一だ。」「ありがとう。おまえはおれをうれしがらせてくれる。」）^{p23}何日間も魚の取れない日が続いている老人に対しての同情が真実さを加えている。同じ舟では漁が出来なくなっているが、老人と少年との間には、精神的な厚いつながりがある。E. Hemingwayも少年と老人の関係を唯一の頼りとして極度の親近感を抱いての描写に違いない。

His shirt had been patched so many times that it was like the sail and the patches were faded to many different shades by the sun. The old man’s head was very old though and with his eyes closed there was no life in his face.^{p15}（シャツは継ぎはぎだらけで、あの帆とそっくりだ。それに陽にやけて、はげちよろになり、さまざまな陰翳をつくっている。頭はやはり老いていた。眼を閉じた顔には生気が感じられない。）^{p16~17}

これは少年の眼に写った孤独な老人の素顔である。しかし老人は、孤独で悲しい、そして貧しい生活の中にも、大きな夢を持っている。老人の見る夢には、暴風雨や女性や大事件でもなく、大きな魚でも戦いでも力くらべでも死に別れた妻君のことでもなかった。現われてくるものと言え、それはただ Every day is a new day.^{p29} ということと、さまざまな土地のこと、海岸で戯れるライオンのみである。老人はこんな姿を好んでいたのかも知れない。漁に出る他は、特別な目当ても、計画もない老人、人間の限界を知った老人であるが、尚も次の句で人間の闘志を強調している。Everything about him was old except his eyes and they were the same colour as the sea and were cheerful and undefeated.^{p6} (この男に関する限り、なにもかも古かった。ただ眼だけがちがう。それは海と同じ色をたたえ、不屈な生気をみなぎらせていた。)^{p4} 人間の気力なのか、忍耐の精神なのか、とにかく人間は不屈のものであることを表現している。この老漁夫の全盛の日日は確かに過去のものとなったかも知れないが、しかし老人は敗れようとしな。い。どんな逆境にあろうとも、どんなに苦痛なことであろうとも、その苦しみに耐え不屈の精神で闘争〈魚との闘争と同時に生活に対する争いも加味して〉をやめようとしな。い。人間は結局は運命的な力に負かされる事は知っていても、老人は最後の最後まで闘い続ける。だから表面上の敗北と言っても内面的には勝利と思はれるのである。

4. 孤独な老人

“Good luck old man.”^{p24} (うまくいくように、お爺さん。)^{p29}と見送られた老人は少年と別れて暗い港から大海原を目指して舟を漕ぎ出す。

The old man knew he was going far out……^{p25} (老人は今日は遠出をしようと考えていた。)^{p30} 一人で希望を抱いた老人は、沖に出る間、魚を探している間、よくひとり言を言い、それが虚無的な情感を実写している。

“Take a good rest, small bird,” he said. “Then go in and take your chance like any man or bird or fish.”^{p53}（「たっぷり休んでいきな，」と老人は言った。「そしたら元気よく飛んでいって，おまえのチャンスをつかむんだな，人間だって鳥だって魚だって，みんな同じことさ。」^{p68}この文章には主人公の感情が触れられていないが，その惨めな感情は十分に表われている。E. Hemingwayは小鳥の背景を象徴的に用いて効果的にし，“……man is not made for defeat.”……“A man can be destroyed but not defeated.”^{p103}（人間は負けるように造られていないんだ。……そりゃ人間は殺されるかも知れない，けれど負けはしないんだ。）^{p136}を指していることは言うまでもない。更に老人の気持が小鳥に移されることにより，現在の老人の孤独，あるいはもっと大きく見て人間全般を代表しての孤独さに対しての辛抱，忍耐というようなことを植えさせているように思うのである。“I wish I had the boy. To help me and to see this.”^{p45}（「あの子がいたらなあ。手つだってもらえるし，見はりもしてもらえるんだが。」）^{p57}とか“I wish I had the boy……”^{p42}（「あの子がいたらなあ。」）^{p53}という少年を思い出した言葉が原本の p42, p45, p48, p49, p54 と 5 回にわたって出て来ている。多く使われているこの言葉は，老人自身が自分の身体の限界を知っているが故に，少年への愛情に加え，女房役として手つだってもらうことを予期している反面，昔のファイトが見られなくなった現在，不漁にあえいでどこまでも不運，不幸のあとがたたない老人の悲劇的な運命を描写しているものである。

次に表はされる不屈の精神で魚と闘っている場面が最も迫力を感じるところである。

85日目にしてどうやら老人にも運の片鱗が片寄ってくる。……today is eighty-five days and I should fish the day well.^{p38}（……今日は85日目だ，どうあっても大漁にしなければならん。）^{p48}そして老人は，“I’ll stay with you until I am dead.”^{p50}（「おれは死ぬまで，おまえにつきあってやる

ぞ)』^{p64~65}と決して挫けることなく、最後まで魚と闘う。網で肩や手が傷だらけになっても、食物が乏しくなっても、心身共に疲れきっても、あくまでも闘う。更に屈せず襲ってくる鮫とも誠心誠意闘い続けるのである。……it is rougher where you are going until you make the shore. …… Now I will pay attention to my work and then I must eat the tuna so that I will not have a failure of strength.^{p54} (海岸に辿りつくまで、まだまだ辛いことがあるだろう。……さあ心を入れかえて、仕事に精だすんだぞ。それから鮫を食はなくてはいかん。体に力をつけておきたいからな。)^{p70~71}

魚が暴動を働く前に、老人は傷の左手の為に、あるいは又、老いた体に元気をふるいおこす為にも、鮫の切身を口に入れて栄養を貯えようとするのである。左手の傷をかばう心情が次のように描かれている。I wonder why he jumped, the old man thought. He jumped almost as though to show me how big he was. I know now, anyway, he thought. I wish I could show him what sort of man I am. But then he would see the cramped hand.^{p62} (だが、さっきはなぜ跳ねあがったのだろう、老人は頭をひねった。まるで自分の大きさを見せるために跳ねあがったみたいじゃないか。おかげで、とにかくわかった、と彼はおもう。それから、おれがどういう人間だか、やつに思い知らせてやりたいものだ。だが、そのとき、やつはおれの左手を見るだろう。)^{p81} しかし左手の傷も癒り、元気が出てくる様相を “I am not religious,”^{p63} (「おれはあまり信心ぶかいほうじゃない。)」^{p82} とヒステリックに言いながらも、Our Fathers and Hail Marys^{p63} (われらの父と聖母マリア)^{p82} に祈りを奉げるのである。With his prayers said, and feeling much better, but suffering exactly as much, and perhaps a little more, he leaned against the wood of the bow and began, mechanically, to work the fingers of his left hand.^{p63~64} (祈禱をすませると、いくらか元気が出てきたようにおもう。しかし苦しいことは前と変わらない、いやむしろ前より苦しかった。かれはへさきに背をもたせか

けて、ほとんど無意識に、左手の指を開けたり閉じたりしはじめた。)p83 祈禱が終って、殆んど癒りかけた左手の心理行動と、左手には無関係に外部との微風とを単純でソフトタッチで文の結合をはかっていることなどは興味深いものがある。更に E. Hemingway は話の進展を試み、老人が魚との戦闘開始を前にして、一寸の余暇にも過去の出来事の夢を好む様子を描写している。ある日、カサブランカの居酒屋でニグロと腕相撲で対戦した時は、一日一晩を費して、強者で好漢のニグロを打負かし、賭けた連中からは「選手」と呼ばれていた当時に返るのである。あるいは又、希望をもってライオンの夢を見るのもタイミング良く描写されているのである。

……and the fight come. The sun was rising for the third time since he had put to sea when the fish started to circle.p85 (いよいよ戦闘開始だ。老人が海に乗りだして以来、三度目の太陽がのぼる、そのころになって魚はようやく輪を描いて廻りはじめた。)p112 そこで、He looked up at the sky and then out to his fish. He looked at the sun carefully. It is not much more than noon, he thought. And the trade wind is rising.p95 (老人は空を眺め、それから魚に眼をやった。今度は太陽のほうをそっとうかがう。昼を大してすぎているなあ、とおもう。それに貿易風が吹いている。)p126 のように年を忘れた老人のすさまじい闘志が伺えるのである。又自然と人間との対照的な描写でもあり、この対照は明らかに人間のはかない運命を象徴して、食うか食われるかの激しい闘争の中に禍んでいるのであるが、結局は人間のように敗北の苦味を何らかの形で味わう時があることを E. Hemingway はこうした老人既ち人間の運命と大自然の風景として象徴的に、しかもカメラレンズのようにもっぱら視覚に訴えるものとして客観的に、非情に描き出しているものである。I moved him, he thought. Maybe this time I can get him over. Pull, hands, he thought. Hold up, legs. Last for me, head. Last for me. You never went. This time I'll pull him over.p91 (「おれはやつを動かした。」と老人は声をあげた、「とうと

う動かしたぞ。」がまたもや老人は気を失いかけた，が，全力をふりしぼるようにして大魚にしがみついている。おれはやつを動かした，今度こそやっつけてみせるぞ。手よ，どんどん網を引いてくれ。脚よ，しゃんとしろ。頭よ，頼むから最後までしっかりがんばってくれ，いいか。しっかりしていてくれよ。いままでがんばってくれたのだからな。今度こそ，ものにしてみせるぞ。) p120~121 E. Hemingwayはまさに Hard-boiled Styleを手硬く守っている形である。つまり人の眼に触れないものを引出そうとする主観的な同情は殆んどなく，それらは常に外面的行動に直結しているということなのである。

5. 帰航の不運

He's over fifteen hundred pounds the way he is,…… p96 (こいつ，見たところ，1500ポンドは超えるというしろものだ。) p123 と苦闘の末にようやく仕止めた魚を眺めて，老人は帰航の途につくのであるが，ここで E. Hemingwayは人間の最後までつきない皮肉な運命に，例え負けたとしても，その敗北者に対して同情心を抱かせず，勝ち抜いて，生き抜くことが老人の唯一の掟として描いているのである。(4)の項で述べた通り85日目にしてようやく大魚にありついた老人は，再び皮肉によって苦しめられる。そして老人の努力も空しく鮫の大群によって，得た魚が食い荒されてしまう。

It was too good to last, he thought. I wish it had been a dream now and that I had never hooked the fish and was alone in bed on the newspapers. p103 (いいことは長つづきしないものだ，と彼は思った。あれが夢だったらよかったのに，魚なんか釣れないほうがよかった。そしてベッドで新聞でも見ていたほうがずっとましだった。今となってはそう思う。) p136 salaoの状態に陥った自己を敗北した老漁夫の姿に仮託してきた

が、未だ自己が *salao* ならざることを証明しようとしている。*salao* と言えば事実この “The Old Man and the Sea” は E. Hemingway の長い生涯に於いて “For Whom the Bell Tolls” 以後の10年間の沈黙期間と、その沈黙を破って発表した “Across the River and into the Trees” の不評によって酷評を蒙った、いわゆる *salao* の状態にあった時の作品である。He was stiff and sore now and his wounds and all of the strained of his body hurt with the cold of the night.^{p118} (老人の体は硬直し、すこし動いても激しい痛みを感じた。体中の傷が、そして無理な使い方をした筋肉が、夜気の冷えこみとともに疼きはじめる。)^{p157} これは前にも触れた通り、老人の心情とは違って、老人も人間としての人体の肉体的限度を知った上での心理的描写である。

He stopped for a moment and looked back and saw in the reflection from the street light the great tail of the fish standing up well behind the skiff's stern.^{p121~122} (ちょっと立ちどまって、うしろをふりかへると、魚の大きな尾が街灯の光を反射して、小舟のともその後方に、ぴんと跳ねあがっているのがみえた。)^{p162}

港についた老人は一人で舟のあとかたづけをやり、テントに帰ろうとしてふと振りかえると、魚の白い残骸が目に入る。

彼は完全に敗北したことを知るのである。せっきくの努力も水泡に帰された老人は、疲労が重ってベッドに横になるかと思うと、“What a fish it was,” ……“There has never been such a fish. ……”^{p124} (まったく大した魚だ。……あんな魚は見たことがない。)^{p165} という描写などは、完全に敗北に終わった老人との皮肉な対比として意味のある場面であろう。老人の敗北は数々のこうした皮肉な対比によって一層強く印象づけられるのである。最後に老人がテントに戻り疲労のあまり眠っている時、旅人の一団が港の近くのレストランに入って来て、マーリンの残骸を見ながら、老人に対してのまさしく皮肉な会話が続けられるのである。“What's that?” she asked

a waiter and pointed to the long backbone of the great fish that was now just garbage waiting to go out with the tide.……“I didn't know sharks had such handsome, beautifully formed tails.”^{p127}（「あれ何でしょう」とつぜん女が大魚の背骨を指さして、かたわらの給仕に聞いた。その時ちょうど、骸骨は潮にのって流れ出ていくところだった。……「あら、鮫って、あんな形のいい、みごとな尻尾を持っているとは思わなかったわ。」^{p170}ごみ屑にすぎない尻尾を「見事だ」とか「形よい」だなどと賞讃する描写などは、本当にアイロニカルに諷刺した会話体であると言えるであろう。しかしE. Hemingwayは、老人がごみ屑などと言われたのにも屈せず、希望をもって、昔なつかしいライオンの夢を見ている姿を外面的描写によって客観的に描き出している。ライオンの夢を見るその姿には、言い知れない悲壮感が湧いて来るのである。

このように、老人が実際に行ったこと、その周囲に存在した事物、それ以外は何も描かれていない。それだけに一つ残らず描かれている確かさを感じさせるものがある。E. Hemingwayはこういう純粹に客観的な外面的描写を用いて、彼自身の主観が認められる理想的な人間像を表現していると言えるのである。

- 注 1) アメリカ文学作家論選集 アーネスト・ヘミングウェイ フィリップ・ヤング 利沢行夫訳 p129 冬樹社 昭51
2) 原文はすべて ERNEST HEMINGWAY The Old Man and the Sea Jonathan Cape, 1958を使用。
3) 訳本はすべてヘミグウェイ全集10 老人と海 福田恆存訳 三笠書房を使用。

参考文献

1. 現代アメリカ文学 龍口直太郎・吉武好考共編 有信堂
2. 現代アメリカ小説序論 高村勝治著 研究社
3. アメリカの文学と生活 齊藤光編 創元社
4. アーネスト・ヘミングウェイ全二冊 カロス・ベーカー, 大橋健三郎 寺門泰彦監訳 新潮社
5. Ernest Hemingway: A Life Story by Carlos Baker. Bantam Books 1970
6. Ernest Hemingway: An Introduction and Interpretation by Sheridan Baker. The University of Michigan 1967